

## 柳宗元疾病攷

小高 修司

の気候の特色を見ることから始めたい。

### 1, 外的環境の影響

先ず明記すべきは、永州や柳州といった嶺南地域が暑湿の地であり、この地での居住は当然ながら暑湿邪を背景とする種々の疾病を来す可能性が高いことにある。元和二年に永州に大雪が降ったという事実<sup>(1, 2)</sup>があったとしても、当時の嶺南の気候は、現在以上に温暖であり、暑湿が大きな問題として存在する時代であった。是に飲酒や喫茶の習慣が重なれば、体内外の湿邪が感応し、様々な病態を惹起する。さらに一般的に衛生状態に大きな問題があった時代でもあり、宗元生存期間中で記録が残されている異常気象と疫病に関する記事を参看する<sup>(3)</sup>。

789年夏淮南、浙東西、福建などで旱魃。井泉多く涸れ、人渴乏し、疫死する者多数。

790年夏淮南、浙西、福建で道疫。

806年夏浙冬大疫、死者大半。

ここで言う「疫」とは伝染性疾患を指すが、現存する医書から関連する記述を見ると、『肘後方』（梁・葛洪265-316撰、現存：金・楊用道撰『肘後備急方』〔『附廣肘後方』〕）に「癘氣兼ねて鬼毒を挟み相注す、名づけて温病と爲す」とある。ここでいう鬼毒とは病原微生物を指していたと考えられる。また同書には「瘴氣疫癘温毒を治する諸方」として20数例の処方<sup>(4)</sup>が挙げられている。「癘」「瘴」などの用語も同じく伝染疾患を意味する。それぞれの中国医学的解釈を見るために、『諸病源候論』卷十の「疫癘病候」「瘴氣候」を注記しておく<sup>(5)</sup>。

柳宗元の詩文でも「瘴癘」「炎毒昏眊」などの記述が見られる。元和四年の注記がある「寄許京兆孟容書（卷三十）」の記述は、

或いは時に寒熱水火 互いに至り、肌骨を内消するは獨り瘴厲に非ざると爲すなり。

元和五年七月の注記のある「與蕭翰林俛書」（卷三十）には、  
蠻夷中に居すこと久し、炎毒に慣習し、昏眊み重ねて 髓<sup>めくら</sup>る、意以て常と爲す。忽ち北風に遇い、晨起きて薄寒 體に中り、則ち肌革疹癩し、毛髮蕭條となり、瞿然として注視し、怵惕以て異候と爲す。

また元和四年の注記がある「與裴墳書」には、

惟れ楚南極海玄冥の所、炎昏を統せず多く疾み、氣力益ます劣り昧。

柳宗元（773-819年）は中国中唐期の政治家・文人である。字は子厚、また出身地や赴任地により柳河東・柳柳州とも呼ばれる。王維や孟浩然とともに自然詩人として名を馳せ、散文の分野では、韓愈とともに宋代に連なる古文復興運動を實踐し、唐宋八大家の一人に数えられる。

徳宗の貞元9年（793年）に進士に挙げられ、貞元14年には難関の官吏登用試験である博学宏詞科に合格、二十八歳には集賢殿正字（政府の書籍編纂部員）を拜命した。新進気鋭の官僚として藍田（陝西省の県名）の警察官僚から監察御史（行政監督官）を歴任した。

八世紀末の唐は、宦官勢力を中心とする保守派と対決姿勢を強め、政界の刷新を標榜する若手官僚グループの台頭が急であり、柳宗元も参加するが、保守派の猛反発に遭い、改革政策はわずか七ヶ月であえなく頓挫し、礼部侍郎に就任し、これからという時に宗元の政治生命は尽きた。政争に敗れた宗元は死罪こそ免れたものの、都・長安（西安市）を遠く離れた永州（湖南省）へ、司馬（今の日本の副知事に当たるも全くの閑職）として左遷された。時に宗元三十三歳。さらに元和十年（815年）には、いったん長安に召還されるものの、再び柳州（広西省壮族自治区）刺史（地方長官；知事に当たる）の辞令を受け、ついに中央復帰の夢はかなわぬまま、元和十四年、四十七歳の若さで歿した。

文字通りの悲憤慷慨の生涯を終えざるを得なかった宗元であるが、実は病情についての柳宗元自身の記述はさほど多くない。一般には柳州に知事として赴任して以来、行政長官としての仕事に従事することが出来たこともあり、精神的にも安定を得ていたといわれている。また逝去と前後して長安に帰ることを許可する使者が発せられたという。

また家族歴を見ると、母親は68歳と比較的長命であったが、父親は57歳、二人の姉も比較的早くに死亡していることは、先天の生命力である腎がさほど強かったとは思えない。

こういった事情を鑑みながら、その早すぎた死亡の理由をさぐることが本稿の目的である。外的環境と精神が及ぼした影響との両面から考える。嶺南地域

## 2. 精神が及ぼした影響

## (1) 永州前期の状態

次に問題とすべきは精神が肉体に及ぼす影響である。直接国政に関わる立場から、政争に敗れ流謫され、しかも司馬という有名無実の職掌に従事せざるを得なかったことは、怒り、憂悲、思い悩み、更に流謫が長期化する事による絶望へと、実に様々の感情に支配されたことであろう。種々の感情（七情）と五臓六腑が個別に相関することは中国医学に於いては周知である(図)。

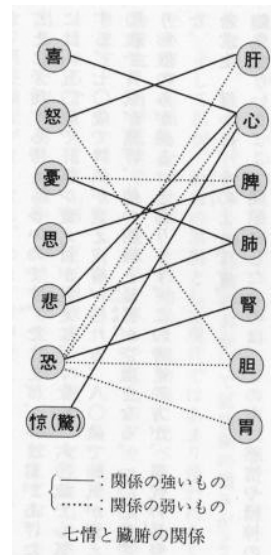
柳宗元は「憂箴」(巻十九)に代表されるように、しばしば憂いを記す。憂悲の感情は肺を傷つける(「悲傷肺」)ばかりでなく、五臓の相生相克という生理的關係に影響し、肺が肝を調整する生理的な働き(「金克木」)に障害が出るために、結果として肝胆の働きに異常が出る。そのため怒りっぽくなったり、逆に気鬱になりやすくなる。臓腑の生理的、病理的相関については注記(6)しておく。

怒りにより気は滞るが、その滞る部位は「肝」「胆」そして「膈(膈)」である。膈に関しては既に『史記』(前90年頃、司馬遷)「扁鵲倉公伝」診藉二に「気膈病」、診藉十四に「膈塞不通、不能食飲」といった記述が見られる。また白川静の『説文新義』が云うように、「膈」は邪霊の侵入の拒絶を意味する重要な部位である。それが人体生理上最も重視される気が、流れるものが阻滞する部位として、「膈」の重要性と結びついていった可能性が指摘できよう(7)。

気滞の最も特徴となる症状は「痞」であり、この点に触れた詩文も散見される。例えば上記した「許京兆孟容に寄する書」の前段には次の文が見られる。

憂い残り骸は魂餘り百病集う所、痞結伏積し食せざるに自と飽る。  
ここに述べられている症状は「胃気痞塞」そのものである。日常、食事中や食後に上腹部のつまりを訴える患者さんは多い。またストレスが多い状況で、季肋部の張りや痛みを訴えるのもやはり「痞」である。

胃気滞の背景にあるものは「肝気鬱結」(「木乘土」の論理)であり、それが彼の政治的環境に基因することは明らかであろう。また元和四年作とされる序飲(巻二十四)には、通常は気滞の改善を見る可能性が高い飲酒によっても改善しないことを記す。



余 痞を病み酒を飲む能わず。是に至り酔うも遂に其の令を益するを損じ、以て日夜を窮めて歸するところを知らず。

関連記述を古典で見よう。『黄帝内経太素』(楊上善撰注、唐高宗期)・巻三十病解には

高塞り閉絶し、上下通ぜざるは暴憂の病と記されており、楊上善の註をみると、

暴しい愁憂による病は膈を塞ぎ、膈中を塞ぐなり。とある。精神状態が膈の(気の)流れに影響することが明確にいわれている。そしてこの膈塞がある時の病状は『黄帝内経明堂』(楊上善撰注、唐高宗期)に明記されている。

中庭・・・胸脅支滿、高塞り、心下嚮嚮然として、飲食下らず、嘔吐し、食して復た還出す。というふうに、飲食に影響が出ることが解る。

また元和五年冬の作とされる「與楊京兆憑書」(巻三十)には、

常に憂恐積り、神志少く、書を讀む所に隨うも又遺忘す。一二年來痞氣尤も甚しく、加うるに衆疾を以てす。動作も常ならず、眊眊然として騷擾内に生じ、霾霧填擁慘沮し、意文章を窮めんとする有りりと雖も、病 其の志を奪う。

しかしその「痞」症状も時には緩解を見たようで、與李翰林建書(巻三十)には、

僕 去年八月自り痞疾の來たること稍已む。往時は間一二日にて作すも、今は一月に乃を二三作用す。南人の檳榔・餘甘 壅隔一作塞を破決す。

檳榔は起源植物・檳榔 *Areca catechu* L. の種子である。駆虫、消積、下気、行水、截虐の作用を持ち、虫積、食滞、腕腹脹痛、瀉裏後重、脚気、水腫、瘡疾などに用いる。余甘は生薬名「余甘子」(また「橄欖」とも云う)、起源植物・余甘子 *Phyllanthus emblica* L. の果実である。清熱利咽、潤肺化痰、生津止渴といった働きがあり、感冒の発熱、咳嗽、咽頭痛、煩熱口渴などに用いる。B型肝炎及びそれから進展した肝ガンに用いるという老中医の経験もあり、碎塊の働きを持つと考えられ、檳榔と共に膈塞を破る作用があることになる。

ではこの文が何時書かれたかであるが、同書によれば元和四年とある。一時的な緩解を見ては居たものの、元和五年冬の作に「一二年來痞氣尤も甚しく」とあることなど、一般には「元和四年頃に絶望的な不安は最高潮に達していた」(8)と考えられており、痞の記述と相関する。

ちなみに気滞で特に問題となるのは膈の痞塞であるが、これを緩解させるのに最も効果的な方法は、膈=横隔膜を積極的に動かすこと、つまり腹式呼吸で

ある。柳宗元が元和四年秋に西山に遊び、山岳を跋扈したこと、さらには後に愚溪と名付ける地域を購入し好みの地に変えていくという行為は、当然ながら心身両面に於いて気滞（＝痞）の解除に大いに役立ったと思われる。六年以降に痞をいう詩文が見られないのも、こういったことが影響したと考えて良いであろう。

## （2）永州後期の状態

下定氏の書籍<sup>(9)</sup>を参照して精神の変化を見よう。

元和五年愚溪に移り住んで以来明るく落ち着いた心境をしばしば示し（P. 73他）ながらも、自殺を思うような厳しい心境（巻四十二・同劉二十八院長述舊言懷感時書事奉寄澧州張員外使君五十二韻之作因其韻增至八十通贈二君子）の間を揺れ動き、孤独寂寞の中に生き、『莊子』や仏教の教えを受けながら、それを乗り越えようとしてたどり着いた究極の境地を「紅雪」は示し（P. 87-89）、無心の境地にまで昇華した（P. 94）。それは時として成功し、宗元の心を癒してきてくれたが、その宗元の心の根底には深い苦悶が在り、貶謫の長期化とともに、悲哀は重さと苦しさを増し、時として狂おしいばかりの憂憤となつてほとぼしる（P. 86, 100）

と記す。

確かに流謫が長期化することで、一生都に帰れないのではないかという不安・恐れを抱くに至ったことは想像に難くない。それは生命力の根本である腎を傷つける（恐傷腎）ことになり、それは母子相関にある肝を更に傷害（水生木）することになり、肝気不足さらに表裏関係にある胆気にも影響し、いわゆる「胆怯」となり、些細なことで怯え・驚きやすくなつていたと考えられる。西洋医学的には鬱状態から多少それが軽快する時点で自殺を引き起こしやすいことが知られているが、上記したように精神的に安定したかに見える状態は、その底に大きな危険をはらんでいたと考えられるのではないだろうか。

このように臓腑の相生・相剋関係から考えて、五臓六腑総てがかなり虚弱な状態にあったと考えられ、心身共に不安定な状態にあったと云えよう。この状態で一時長安に呼び戻され、旅の途中では大きな喜びを抱いていたことは、逆に心を傷つけ（「喜傷心」というより、舞い上がり「心火上炎」状態に近い）、子が親を逆に犯す相侮関係により、ここでも肝を傷害する（「心侮肝」）に至る。更にそれが柳州への新たな流謫という現実に出会ったわけだが、その心境の悲惨さは語る事が出来ないほどである。

次に愚溪時代の作とされる巻四十三の「茅簷下始栽竹」の詩には次項で述べる脚氣などとの相関を思わせる疾病についての記述が見られる。

瘴茅を葺き宇と為す 溽暑は常に肌を侵し 適ま重脛の疾有り 蒸鬱は寧ろ宜しき所 東鄰は幸にも我を導き 樹竹は涼颯を邀す 欣然として吾が志を愜す

「重脛の疾」とは何か。柳宗元の文には第一章で記したように、もう一箇所にも見られる。巻三十「與蕭翰林俊書」である。医書を検索した結果、下記の如く「瘰癧」と関連する記述に見られる「脛脛」のことではないかと考えるに至った。

『医心方』が引く『小品方』（六朝時代、陳延之）には以下の記述がある。

瘰癧が有る者、始めて作すに櫻核と相似たり。其の瘰癧の病は喜<sup>しばし</sup>ば頸下に生じ、當に中央に有り兩邊に偏らざるなり。皮は寛く急ならず、脛脛と垂れ然るは則ち是れ瘰癧なり。中國人で氣結し瘰癧を患う者は、但だ脛脛と垂れるも脛に及ぶこと無きなり。長安及び襄陽、蠻の人は其の沙水を飲み善く沙瘰癧を病む、脛有り壘壘として根り無く、浮動が皮中に在り。

「脛脛」に関連する記述は『医心方』以外にも『外台秘要方』（王燾、753年頃）などにも見られる。『世医得効方』（元・危亦林撰、1337）には「重脛」とある。併せて注記<sup>(10)</sup>した。『医心方』の校勘記によると、「垂脛脛然」とは、垂墜の貌。脛はまた足腫も為す。脛は墜と音義同じ。

とある。『諸病源候論』に病因としてあげられている「憂患思慮が腎氣を動かす」と云うことが柳宗元と関連することは明らかであろう。

「瘰」とは頸部正中にある軟部腫瘍のこのよう形で、「重脛の疾」という言い方から、どちらかという中に液体を含む柔らかい腫脹のようで、ガマ種とか正中頸嚢胞のような疾病がイメージされる。

『医心方』校勘に「足腫」と有ることから調べたところ、『旧唐書』（後晉司空中書門下平章事劉昫撰）には「痿弱重脛之疾」として、『春秋左傳注疏』（晉杜氏注、唐陸德明音義、孔穎達疏）には「沉溺重脛之疾、注沉溺濕疾重脛足腫音義」との用例が見られた。この場合は、後述する「脚氣」との関連が考えられるところである。

## 3. 柳州時代の病態——死因の考察

次に柳州時代の病態を考えてみよう。上記した臓腑の虚弱状態を背景として、更に永州以上に暑湿が高い劣悪な環境の中での生活は、以下に挙げる疾病が死因に繋がることは十分納得できることである。

### （1）霍乱について

元和十二年の注記がある「寄韋珩（巻四十二）」の記述を見る。

今年毒を噬くらい霍疾を得、心を支き腹を攪むねすこと戟と刀（の如し）。爾來氣少くして筋骨露さる、蒼白瀉かきみだ汨として顛毛（の如し）に盈つ。

ここでは心腹痛の激しさを云い、またそれ以後、気が衰え筋肉が萎縮し骨が顕わになったこと、白髪が一気に増えたことを云っている。その原因としてあげられている「霍疾」とは「霍乱の病」のことを言うと思われる。また病因としてあげられている「毒を噬う」を含めて考えてみたい。ちなみに霍乱は急性の胃腸炎であるが、その病因として赤痢、コレラや腸チフスなどの法定伝染病のみならず、腸管出血性大腸菌感染による O-157 や種々のウイルス感染も含まれる。

本文の前段に種々の事項が列記されているが、まずは霍乱の定義を『諸病源候論』（610、巢元方）巻卷之二十二の霍亂候で考える。

霍亂とは、人の温涼調わざるに由り、陰陽清濁の二氣が、相（互）に干亂することが有る時、其の亂れが腸胃の間に在る者は、たまた遇またま飲食することにに因り、變じて發し、則ち心腹が絞痛する。先ず心痛む者は先ず吐き、先に腹痛む者は先ず利（＝下痢）し、心腹並ともに痛む者は吐利俱に發する。風を挟みて實なる者は、發熱し頭痛み體疼きて復た吐利するも、虚なる者は但だ吐利し心腹刺痛するのみ。亦た飲酒食肉するに際し、腥膻生冷（の食品）が過度に有り、居處に節（度）が無く、或いは濕地に露臥し、或いは風に當り涼を取る。風冷の氣が三焦に歸し、脾胃に傳わり、脾胃が冷を得て磨ならず、磨ならざれば水穀は消化できざるに因る。亦た清濁の二氣が相い干し、脾胃虚弱なれば便ち吐利し、水穀不消なれば心腹脹滿たら令む。皆な霍亂と成る。

柳宗元の文と相同の記述があり、彼の疾病は霍乱であったと確認できよう。四庫全書版『柳河東集』注によると、本文の作成は元和十二年とある。ところが『証類本草』（1100年頃、唐慎微）巻第四「食塩」の項に以下の記述がある。

唐柳柳州『救三死』を纂す。霍乱を治す塩湯方に云う。元和十一年十月乾霍乱を得た。上は吐すこともなく、下は利することなくも、冷汗三大斗許り出でて、氣即ち絶す。

『神農本草經疏』（1623頃、繆希雍）にも（年紀の記述はないものの）相同の記述がある。ただここでは「乾霍乱」ではなく「霍乱」となっている。『諸病源候論』巻之二十二の乾霍亂候を見よう。

冷熱調わず、飲食節なくば、人の陰陽清濁の氣相干し、腸胃の間を變亂せ使め、霍亂と成る。霍亂する者は多く吐利するなり。乾霍亂なる

は是 腸胃に於いて冷氣搏ち飲食消せざるに致り、但だ腹滿・煩亂・絞痛・短氣するも、其の腸胃 先ず實を挾むが故に吐利せざるを名づけて乾霍亂と為すなり。

つまり腹滿・腹痛・煩躁・息切れなどの症状はあるものの、嘔吐下痢の症状が見られないものを乾霍乱というもあり、『証類本草』にあるように柳宗元の病状は乾霍乱と云えそうである。

さらに『諸病源候論』の霍亂後不除候を見ると、病後に不調が持続することが記されている。

霍亂の後にて不除とは、胸膈の宿食盡きざるを吐に由り、或いは吐を得ざるに但だ其の冷氣散ぜざるを利す。食 胃に入るも胃氣未だ和せざるに因り、故に猶 脹痛煩滿するを不除と謂うなり。

霍乱の記す病状は腹痛（嘔吐下痢の有無はおいて）を主とする、まさにコレラや腸チフスのような胃腸型伝染疾患であり、「不除候」にあるように感染後に不調が持続して死因となった可能性も示唆される。

## （2）脚気について

もう一つ死に繋がる可能性をもつ疾病に触れておきたい。脚気の記述である。脚気「きゃくき（きゃっき）」はビタミン欠乏症によるいわゆる「かっけ」の概念を含むと思われるが、基本的概念はずっと広いと考えて戴きたい。腎虚（古代での意味は、現代中国医学の気血虚を意味する）を背景因子として、腎の経絡に風寒湿邪が進入することで起きる病態と考えられており、「黄帝の時は名づけて厥と為し、両漢の間には名づけて緩風と為し、宋齊の後には之を脚気と謂った」とある。さて「蒼韋中立書」（巻三十四）の記述を見よう。

僕謫過されて自り以來、益ます志慮少く、南中に九年居し、脚氣の病を増す。

四庫全書版『柳河東集』注によると、「此書は元和八年」とある。元和八年に増悪を見た「脚気」病であるが、脚気に関する記述は『柳河東集』ではこのみである。但し上記した「與李翰林建書」（巻三十）の後段の次の文は同様の症状の記述と考えられる。

大過すれば陰邪敗ると雖も、已に正氣を傷り、行けば則ち膝顫え、坐すも則ち痺痺れる。欲する所は氣を補い血を豊かにし筋骨を彊くし心力を輔うにあり。

ところが『普濟本事方』（宋、許叔微、1143）に脚気病に関連する記事があると指摘する文献<sup>(11)</sup>を見つけた。脚気病に関する医学記述は後に詳述するとして、

取り敢えず『普濟本事方』を調べたところ、卷之七に注記<sup>(12)</sup>する記述が有り、更に渉獵すると類似の記述が医書中に散見されることが分かった。『醫說』（張杲、1189）脚氣痞絶の項<sup>(13)</sup>、『医学綱目』（楼英、1380）<sup>(14)</sup>、『名醫類案』（江瓘撰、1549）<sup>(15)</sup>、『神農本草經疏』（1623）、卷14主治參互の項<sup>(16)</sup>、『張氏医通』（張璐、1695）「杉」の項<sup>(17)</sup>、『蘭臺軌範』（徐大椿、1764）卷六<sup>(18)</sup>であるが、内容が少しずつ異なっており、それを勘案すると『普濟本事方』の記述は、以下が正しいのではないかと考えられる。

腹→左脅腹、困塞→咽塞、桔葉→橘葉、合子碎之→合搗碎之、予病→余病となろう。改めて表記すると以下になると考える。

唐柳柳州纂の『救三死方』に云う。元和十二年二月に脚氣を得、夜半に痞絶す。左脅腹に塊有り大きこと石の如く、且つ死（するがごとく）、咽塞がり人を知らざること三日、家人號哭す。滎陽の鄭洵美の傳えし「杉木湯」を服すること半ばにして、食頃大いに下すこと三次、氣通じて塊散ず。用いしは杉木節一大升、橘葉一升、葉無くば皮を以て之に代う、大腹檳榔七箇、合せて搗き之を碎き、童子小便三大升と共に煮て一升半（を得て）、分二して服す。若し一服にて決利を得れば、後は服すること停める。以て前の三死は皆死せんか。會い教え有る者は、皆死を得ず。恐らく他人の不幸に類する余病有らん。故に傳えん。

また「脚氣」を『醫說』『名醫類案』は「乾脚氣」とし、『医学綱目』は「香港脚」とする。それぞれの意味を検証するが、いずれも元和十二年の発病とあり、これも元和十四年に四十七歳という若さで死亡する病因と関連する可能性が示唆されるので、その点についても考えたい。

まず『諸病源候論』卷之十三の脚氣緩弱候により総論を見る。

夫れ脚氣の病たるは、皆 風毒を感じるにより此の病を得るも、多くは即ちには覺えず。

また『外台秘要方』第十九の「之を得る所由を論ず」を見ると、

凡そ四時の中、皆濕冷の地に久立久坐を得ず、亦た酒酔に因りて汗出ずるを得ず、衣靴襪を脱ぎ、風に當り涼を取るは、皆 脚氣を成す。若し暑月に濕地に久坐、久立する者は、則ち熱濕の氣が經絡に蒸入し、必ず熱を發し四肢酸疼し煩悶するを病む。

乾脚氣や香港脚の用語は金元以降の用例のようである。今回の検索の中では『医学綱目』（楼英、1380）が最も古いようだが、詳述されているのは『万病回春』（明・龔廷賢、1660）卷之五である。

麻は是れ風、痛は是れ寒、腫は是れ濕。足の内踝骨 紅く腫れ痛む者は名づけて繞カ（足偏に華）風と曰う。足の外踝骨 紅く腫れ痛む者は名づけて

て穿踈風と曰う。両膝が紅く腫れ痛む者は名づけて鶴膝風と曰う。両腿膀痛する者は名づけて腿ギ（肉月に義）風と曰う。腫れる者は名づけて濕香港脚。濕（多き）者は筋脉弛長して軟、或いは浮腫、或いは腫瘡の類を生ず、之を濕香港脚と謂う。利濕疏風するが宜し。腫ざる者は乾香港脚と名づく。乾は即ち熱なり、筋脉蜷縮し攣痛し枯細にして腫れざるは、之を乾香港脚と謂う。潤血清燥するに宜し。汗無く走注するを風勝と為す。風なる者は脉浮、汗して愈ゆるなり。拘急掣痛するは寒勝と為す、寒なる者は脉遲、温めて愈ゆるなり。腫満重痛するは濕勝と為す、濕なる者は脉細、滲みて愈ゆるなり。燥渴便が實するは熱勝と為す、熱なる者は脉數、下して愈ゆるなり。

ちなみに現代中国語では香港脚とは水虫のことだが、もちろんここでは脚氣のことである。

脚氣が死に至る状態となるのは、「脚氣衝心」であろう。『傷寒論攷注』（1866年頃上梓、森立之）に見られる森立之の按語によると、

凡そ脚氣衝心とは、咳上氣、奔豚上氣の類にして、並びて皆な水飲の所爲と爲す。水飲が陽氣の道路を阻隔し、故に其の氣が上衝し、閉塞して通利せず、桂枝は能く此の寒鬱冷滯の氣を温散順下す。

『諸病源候論』の脚氣心腹脹急候を見ると、

此れは風濕の毒氣が脚從り内に上入し、藏氣と相搏ち結聚して散ぜざるに由り、心腹脹急するなり。

と記されている。さらに『諸病源候論』の脚氣緩弱候を見ると、

上へ廻り心を衝き氣上る者、或いは舉體轉筋し、或いは壯熱頭痛し、或いは胸心衝悸し、寢處も明らかに見えざらんとす。或いは腹内苦痛して下（痢）を兼ねる者、或いは言語錯亂し善く忘れること有りて誤れる者、或いは眼濁り精神昏憤する者、此れ皆 病の證なり。若し之を治すること緩なれば、便ち上りて腹に入る。腹に入り、或いは腫れ或いは腫れざるも、胸脇に氣滿ちて上るは便ち人を殺さん。

と死に至る可能性が論じられている。

更に『外台秘要方』には次のような興味深いことが記されている。

（脚氣にとって）生薑、蒜、豉を當に食することは大いに佳し。麩及び羊肉、蘿蔔、蔓菁、韭を食すること、酒に酔いて房室（に入ること）、冷濕（の所）に久立すること、船行し水氣（多い環境にいること）宜しからず。夏月に屋中の濕氣や熱氣（が多いこと）、勞劇しいこと、哭泣憂憤すること、此等の如き類いは、好く氣を使って發せしむなり。

柳宗元の日常生活に於ける状態が、脚氣の病態を一層悪化させた可能性が示唆

されよう。

#### 4. その他の課題

##### (1) 石鍾乳について

柳宗元が「與崔饒州論石鍾乳書」（卷三十二）でその効果を挙げている。

以て之を微食すれば、人を榮華溫柔し、其の氣を宣やかに流し、生胃通腸し、壽を善くし康寧せしめ、心平かに意舒やかにせ使む。

更に『赤水元珠』（明孫一奎撰、1584）卷十・辯鍾乳石に次の文が見られる。  
生生子曰く鍾乳石を按ずるに、本天地冲和の氣融結して成る、故に之を服食すれば、以て元陽を壯んにするも可にして百病を療するなり。柳子厚は博く人を治するなり。當時服食する者の功有るを目撃し、<sup>とりあえ</sup>姑<sup>と</sup>ず文集に載入し以て其の傳を廣くす。

腰脚弱を療することから、該症状に悩んでいた宗元自身も服食していた可能性は考えられるが、その資料は見あたらずコメントできない。石鍾乳の薬効は『外台秘要方』第三十七卷に石鍾乳を用いた処方が見られるが、その一例を挙げると、

風虚勞損、腰脚弱を療し、補益充悦し氣力を強くする法。

##### (2) 『救三死方』について

『救三死方』とは、上記したように、霍乱に対処する「塩湯方」、脚氣に対する「杉木湯」が見つかったことになるが、あと一つは何であろうか？

『續名醫類案』（清魏之琇、1770）卷三十四「疔」の項にその答えがあった。劉禹錫が纂した『柳州救三死方』に云う。元和十一年に疔瘡を得て、凡そ十四日益ます篤く、善き薬を之に傳えんとするも皆な知ること莫し。長樂賈方伯が教える蛻螂肉を用いるに、一夕にして百苦皆な已む。明年正月に、羊肉を食し、また大いに（疔瘡）を作す。再び用いるに亦た神の如くに效く。其法は一味を瘡に貼ること半日許り。再び易えることも可なり。血盡き根出でて遂に愈ゆ。蛻螂の心腹下を度し之を取る。其の肉稍や白きはなり。所以羊肉を食して又大いに作すを云うは、蓋し蛻螂は羊肉を食する故のみ。用いる時には便ち羊肉を食するを禁ず。其の法は蓋し葛洪『肘後方』に出るなり。

またほぼ同文が『神農本草經疏』卷二十二<sup>(19)</sup>、『普濟方』（明・朱橚等撰、1406）卷二百七十四<sup>(20)</sup>にも見られる。これらの文で更に興味深いのは、その出典である。今まで『柳宗元が編纂した救三死方』と思っていたが、『劉禹錫

が纂した柳州救三死方』と明記してある書籍が『神農本草經疏』『續名醫類案』『普濟方』と見つかったことになる。宗元自身が瀕死の状態にあった病態を記した書籍であるから、その後回復した時点で書いたとも考えられるが、これらの疾病に罹患後数年で死んでいることを勘案すると、状況から考えても『劉禹錫纂』と理解する方が妥当なように思われるが如何であろう。

ちなみに「死方」という詞であるが、古代医書にはしばしば見られるようで、例えば『医心方』（丹波康頼撰著、984年成書）を見ると、「治霍亂欲死方第十三」「疲極欲死方」「腸滑洞泄困極死方」「治卒魘欲死方」「治自縊死方」「治胸中乏氣而嘔欲死方」など頻出し、種々の病因により死せんとする状態を、回復させるための処方と云うことになる。

##### (3) 仙靈毗について(含む：踵息) (卷四十三・種仙靈毗による)

一般生薬名は「淫羊藿」であり、「仙靈脾（毗）」は異名である。原植物：淫羊藿 *Epimedium brevicornum Maxim.* の茎と葉である。最古の本草書である『神農本草經』下品に記載されており、「陰痿、絶傷、茎中痛を治し、小便を利し、氣力を増し、志を強くす」とある。宗元の応用観点はむしろ「筋を強くし、骨を健やかにし、風を去り湿を除く」ことにあり、腰膝の酸軟、痺痛を除くことにあったであろう。まさに詩の「疾を治すこと源よりするを貴ぶ」にある如く、風湿・冷えなどによる病因を根本から治すための生薬である。

またこの詩注に興味深い詞が見られる。それは「呼吸環りて跟<sup>かかと</sup>に帰らしむ」であるが、これは一般に「踵息」と呼ばれる『莊子』大宗師篇に見られる養生法の一つのことと思われる。石田秀実氏の「踵息考」に詳述<sup>(21)</sup>されているが、氏によれば「口腔から足元までの間を、身体を貫きながら上下する呼吸のこと」という。ここでも宗元が『莊子』と深い関わりを持っていたことが明らかになる。

#### まとめ

1, 母親は68歳と比較的長命であったが、父親は57歳、二人の姉も比較的早くに死亡していることは、先天の生命力である「腎」がさほど強かったとは思えない。

2, 流謫された永州や柳州といった嶺南地域の気候の特色は、暑湿の地ということである。この地での居住は暑湿邪を背景とする種々の疾病を来す可能性が高い。当時の嶺南の気候は、現在以上に温熱であり、是に飲酒や喫茶の習慣が重なれば、体内外の湿邪が感応し、様々な病態を惹起する。



3, 一般的に衛生状態に大きな問題があった時代でもあり、詩文でも「瘴癘」「炎毒昏眊」などの記述が見られ、種々の伝染疾患に罹患する恐れが高かったと云える。後記する霍乱もその一種である。

4, 次に問題とすべきは精神が肉体に及ぼす影響である。怒り、憂悲、思い悩み、更に流謫が長期化する事による絶望へと、実に様々の感情に支配されたことであろう。

5, 気詰まりの最も特徴となる症状は「痞」であり、永州前期にはこの点に触れた詩文も散見される。これを緩解させるのに最も効果的な方法は、腹式呼吸である。山岳を跋扈したこと、愚溪と名付ける地域を購入し好みの地に変えていくという行為は、心身両面に於いて気滞（＝痞）の解除に大いに役立ったと思われる。

6, 永州後期には『莊子』や仏教の教えを受け、孤独寂寞の中に生きながら無心の境地にまで昇華したが、心の根底には深い苦悶が在り、貶謫の長期化とともに、悲哀は重さと苦しさを増し、時として狂おしいばかりの憂憤となつてほとぼしる、と一般に説かれる。しかし流謫の長期化により、不安・恐れ念は強まり、腎・肝・胆を傷つけ些細なことで怯え・驚きやすくなつていたと考えられる。臓腑の相生・相剋関係から考えて、五臓六腑総てがかなり虚弱な状態にあったと考えられ、心身共に不安定な状態にあったと云えよう。

7, 「重膹の疾」についても考察した。

8, 臓腑の虚弱状態を背景として、更に永州以上に暑湿が高い劣悪な柳州時代には、霍乱・脚氣といった死に繋がる虞を持つ疾病に罹患している。これらの疾病の分析解説を行い、短命に終わった宗元の死因を考察した。

9, 詩文に見られる石鍾乳と仙靈毗について検討した。

10, 宗元の編纂と考えられている『救三死方』は、『續名醫類案』に有るように、劉禹錫が纂した『柳州救三死方』と理解する方が妥当性が高いと考えた。

## 文献と注

- (1) 笈文生：『唐宋文学論考』p. 221に下定氏の論文引用。
- (2) 下定雅弘：『柳宗元一逆境を生きぬいた美しき魂―』pp. 97-98, 勉誠出版、2009, 東京
- (3) 中国中医研究院主編：中国疫病史鑒 pp. 107-111, 中医古籍出版社、2003
- (4) 顧植山：疫病科技沈 pp. 44-48, 中国医薬科技出版社、2003
- (5) 『諸病源候論』(610、巢元方)  
卷10 疫癘病候  
其病與時氣温熱等病相類。皆由一歳之内、節氣不和寒暑乖候、或有暴風疾雨露露不散、

則民多疾疫、病無長少率皆相似、如有鬼厲之氣、故云疫癘病。

卷10 瘴氣候

夫嶺南青草黃芒瘴猶如嶺北傷寒也。南地暖故太陰之時、草木不黃落、伏蟄不閉藏、雜毒因暖而生。

(6) (右図)本来、相生(母が子を生む)関係も相克(克する相手の働きを調整する)関係も生理的なもの。それが相手に害を及ぼすほどの病理的な状態の場合を相乘関係と呼ぶ。また子の力が強大になり過ぎて母を害するようになる場合を相侮関係と呼ぶ。

(7) 小高修司：「関格」名義変遷攷、日本医史学雑誌55(1) 57-75, 2009.

(8) 小野四平：柳宗元の永州遊記、『韓愈と柳宗元』pp. 266-267, 汲古書院、1995、東京

(9) 文献2と同じ。

(10) ①『医心方』治瘵(88)方第十四

《病源論》云：瘵者，由憂恚氣結所生。亦由(89)飲沙水[20]，沙隨氣入於脈，搏頸下而成之。初作與櫻核(90)相似，而當頸下也，皮寬不急，垂臄臄然[21]是也。恚氣結成瘵者，但垂臄臄無核也；飲沙水成瘵者，有核臄臄無根，浮動在皮中。又云：三種瘵，有血瘵[22]，可破之。有息肉瘵，可割之。有氣瘵，可具針之。

《養生方》云：諸山水裏土中出泉流者，不可久居。常食作瘵病，動氣增患。

《小品方》云：有瘵病者，始作與櫻(92)核相似。其瘵病喜生頸下，當中央不偏兩邊也。皮寬不急，垂臄臄然則是瘵也。中國人患氣結瘵者，但垂臄臄無核及也。長安及襄陽蠻人其飲沙水善病沙瘵，有核臄臄耳無根，浮動在皮中。

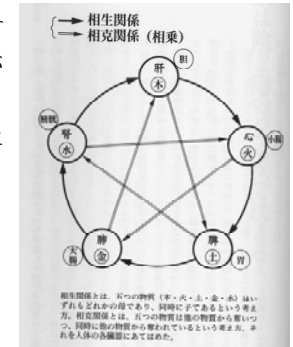
[21]垂臄臄(zhui 墜)然：謂其形象鼓捶一樣連串下垂。

②『外台秘要方』瘵病方一十八首

《小品》瘵病者，始作與櫻核相似，其瘵病喜當頸下，當中央不偏兩邊也。乃不急臄然，則是瘵也。中國人息氣結瘵者，但垂臄臄無核也。長安及襄陽蠻人，其飲沙水喜瘵，有核瘵瘵，耳無根浮動在皮中，其地婦人患之。腎氣實，沙石性合於腎，則令腎實，故病瘵也。北方婦人飲沙水者，產乳其於難，非鍼不出，是以比家有不能救者，良由此也。瘵瘵方。小麥一升。淳苦酒一升，漬小麥令釋，漉出暴燥，複漬使苦酒盡，暴麥燥，搗篩。以海藻三兩別搗，以和麥末令調，酒服方寸匕，日三。禁鹽、生魚、生菜、豬肉。

③『世醫得效方』卷三 控涎丹

凡人忽患胸背手脚腰膝隱痛不可忍連筋骨牽引釣痛坐臥不寧時時走易不定俗醫不曉謂之走注便用風藥及針灸皆無益又疑風毒結聚欲為癰疽亂以藥貼亦非也此乃是痰涎伏在心膈上下變為此疾或令人頭痛不可舉或神昏倦多睡飲食無味痰唾稠粘夜間喉中如鋸聲多流涎手



脚重腿冷痺氣脉不通誤認為癱瘓亦非也凡有此疾但以是藥不過數服其疾如失甘遂去心紫大戟去皮白芥子真者各等分右為末糞糊圓如梧子大曬乾食後臨睡薑湯或熱水下五七圓至十圓如疾猛氣實加圓數不妨其效如神加味控涎圓一方見喘急類

(11) 蔣凡：文章并時壯乾坤——韓愈柳宗元研究 pp. 179-187、上海教育出版社、2001、上海

(12) 唐柳柳州纂救三死方云、元和十二年二月得脚氣。夜半痞絕、腹有塊大如石、且死、且死、因塞不知人三日、家人號哭。滎陽鄭詢美傳杉木湯。服半、食頃大下三次、氣通塊散。用杉木節一大升、桔葉一升、無葉以皮代之、大腹檳榔七箇、合子碎之、童子小便三大升、共煮之一升半、分二服。若一服得決利、停後服。以前三死皆死矣、會有教者、皆得不死。恐他人不幸有類予病、故傳焉。

(13) 唐柳柳州纂救死三方云元和十二年二月得脚氣夜半痞絕左脅有塊大如石且死。因大寒不知人三日家人號哭。滎陽鄭詢美傳杉木湯。服半食頃大下三次、氣通塊散。用杉木節一大升橘葉一升無葉以皮代大腹檳榔七箇合而碎之童子小便三大升共煮一升半分二服若一服得快利停後服已前三日死矣、會有教者得不死恐他人不幸有類予病故傳焉本事方(『醫說』)

(14) [唐]柳宗元纂救死方 元和十二年二月，得香港脚，夜半痞絕，脅有塊大如石，且死。因大寒不知人三日，家人號哭，滎陽鄭詢美傳杉木湯，服半食頃，大下三次，氣通塊散。其方用杉木節一大升，橘葉一大升，無葉以皮代之，大腹檳榔七個，合搗碎之，童便三大升，共煮取一升半，分二服，若一服得快利，停後服。(『医学綱目』)

(15) 唐柳柳州纂救死三方元和仲春得脚氣脚氣有乾溼之分夜半痞絕左脇有塊大如石且死。因大寒不知人三日家人號哭滎陽鄭詢美傳杉木湯服半食頃大下三次氣通塊散用杉木節一大升橘葉一升無葉以皮代大腹檳榔七箇合而碎之童便三大升共煮一升半分二服若一服得快利停後服此乃死病會有教者乃得不死本事方 (『名医類案』)

(16) 柳柳州纂救死三方云元和十年二月得脚氣夜半痞絕脇有塊大如石且死因不知人三日家人號哭滎陽陳詢美傳杉木湯服半食頃大下三行氣通塊散方用杉木節一大升橘葉切一大升無葉則以皮代之檳榔七枚童子小便三大升共煮一大升半分為兩服若一服得快即停後服此乃死病會有教者乃得不死恐人不幸病此故傳之。(『神農本草經疏』)

(17) (杉〔辛微温無毒。發明，杉氣芬芳，取其薄片煮湯薰洗IO瘡，無不獲效，其性直上，其節堅勁，有杉木湯，治脚氣痞絕，俛下有塊如石，方用杉節橘叶各一升，大腹檳榔七枚，連皮碎搗，童便三升，共煮減半服之，大下三行，氣塊通散，此鄭問美治柳柳州法也，杉叶治風虫牙痛，同芎細辛煎酒含嗽，杉子治疝氣痛，一發一粒研酒服。(『張氏医通』)

(18) 杉木湯本事方唐柳柳州云元和十二年二月得脚氣夜半痞絕脇有塊大如石且死因塞不知人三日滎陽鄭詢美杉木湯服半日食頃大小便三次氣通塊散用杉木節一大升橘葉一升無葉以皮代之大腹檳榔七個合子碎之童子小便三大升共煮一升半分二服若一服得快病停後服(『蘭臺軌範』)

(19) 神農本草經疏 卷二十二 明 繆希雍撰

劉禹錫纂柳州救三死方云元和十一年得疔瘡凡十四日益篤善藥傳之莫救長慶買方伯教用・娘心一夕百苦皆已明年正月食羊肉又大作再用如神驗其用蛻娘心在腹下度取之其肉稍白是也貼瘡半日許再易血盡根出即愈・娘畏羊肉故食之即發其法蓋出葛洪肘後方

(20) 續名醫類案 卷五十五 錢塘 魏之琇撰

劉禹錫纂柳州救三死方云元和十一年得疔瘡凡十四日益篤善藥傳之皆莫知長樂買方伯教用蛻娘肉一夕而百苦皆已明年正月食羊肉又大作再用亦如神效其法一味貼瘡半日許可再易血盡根出遂愈蛻娘心腹下度取之其肉稍白是也所以云食羊肉又大作者蓋蛻娘食羊肉故耳用時便禁食羊肉其法蓋出葛洪肘後方也本草

(21) 石田秀実著：『こころとからだ』pp. 277-315踵息考、中国書店、1995、福岡市